

「芸術を、自然を、日々の営みを愛するすべての人たちへ」

——森洋子著『ブリューゲルと季節画の世界』書評

平川佳世（京都大学文学研究科教授）

子供たちが元気に遊ぶ様子や農村の慎ましやかな結婚式、北方ヨーロッパの美しい自然や街並みを繊細な筆致と色彩で描いたピーテル・ブリューゲル（父）は、一六世紀、つまり、今から五百年近く昔に活動した芸術家であるにも関わらず、今日の日本において、最も人気の高い西洋絵画の巨匠の一人である。本書は、我が国を代表するブリューゲル研究者である森洋子氏が、長年にわたり取り組んできた研究の成果を、多くの挿図と平易な語り口で、詳細かつ分かりやすくまとめた、ブリューゲルのファン待望の書である。

かく言う私もブリューゲルは大好きな画家で、微に入り細に入り描きこまれた絵を前に、時を忘れて見入ってしまうことがある。そんな私が一番好きなブリューゲル作品は「季節画」連作、まさに、本書が論じる作品である。「月歴画」連作とも呼ばれるこの連作は（作品の名称をめぐっては本書に詳しく論じられている）、「早春」「春」「初夏」「夏」「秋」「冬」の六点からなり、現在は、ウィーン美術史美術館などに所蔵されている（連作のうち「春」は現存せず）。各々、縦約一二〇センチ、横約一六〇センチの画面に、季節ごとに移り変わる雄大な自然とそこで繰り広げられる農民たちの日々の営みが、実に生き生きと細やかに描かれており、鑑賞者を魅了してやまない。

美術史研究者にとって、人々の日々の生活の様子を題材とした風俗表現の読み解きは、実は、とても難しい。一見、難解に見える神話画やキリスト教主題の絵画の方が、典拠となるテキストを勉強すればよいので、描かれたモチーフや物語場面を理解するのは容易である。それに対して、農民や庶民の生活の諸相が当時の史料に詳述されることは滅多にない。祖父母の代までは農家だった私は、子供の頃から農作業の様子を耳にしたり、地域に残る農具を見たりしていたので、ブリューゲルが「季節画」連作に描いた農作業の内容をある程度は理解することができる。しかし、家畜の屠殺やワイン造りなどの知識は全くない。ブリューゲルは本連作においてそうした作業を事細かに描いているので、この農民たちは一体何をしているのだろうか、と頭を悩ませることも多々あるのだ。

本書は、ブリューゲルが「季節画」に描いた人々の行いを十全に理解するのに最適である。森氏は、ブリューゲルの活動したネーデルラントに加えてドイツやフランスにまで射程を広げて、月歴画、季節画の先行作例を網羅し、そこに描かれた季節の労働や行事の内

容を事細かに同定する。美術史や民俗学における膨大な研究の精査に加えて、時には、現代のワイン製造者などへのインタビューを通じて得た知識を応用し、絵画に描かれた農作業が説得力をもって読み解かれていく様は、爽快である。本書を読んで改めて「季節画」連作を鑑賞すると、ブリューゲルがいかに熱心に先行作例を学習して十分に咀嚼した上で、同時代の農作業の様子をも詳細に観察し、それを絵画面にまとめ上げたかが、わかるのである。

本書はなによりも、森氏の長年の研究成果を凝縮した第一級の美術史の専門書であり、ブリューゲルや北方ヨーロッパ美術の研究に携わる者や、農業史や技術史の資料として絵画を参照したい歴史家にとって、有益で示唆に富む。補遺として、最新のブリューゲル研究の国際的動向が報告されているのも、ありがたい。研究者を志す若者には、是非、「あとがき」から読むことをお勧めしたい。「あとがき」には森洋子という一人の研究者の歩み、そして、どのような経緯でこの壮大なテーマに取り組むに至ったかが記されている。そうした経緯を踏まえて本論を読むと、一人の研究者のうちに知の体系が生き生きと構築されていく様を、味わうことができるのである。一方、本書は、ブリューゲルの絵画芸術を愛するすべての人々にとっても、必携の書である。ブリューゲル愛好家には、第六章「ブリューゲルの連作「季節画」」から読み始めることをお勧めする。本章には、注文主や当初の展示場所など、本連作についての興味深い歴史的事実に加え、未解決の議論についても諸説交えて紹介されている。その上で、早春を描いた《暗い日》から雪景色の素晴らしい《雪中の狩人》までの一枚一枚の造形構成、各モチーフの同定、伝統的な月歴画図像との比較などが丁寧に論じられているのである。そして、章の最後には、このような素晴らしい作品を残したブリューゲルの農民観についてのこれまでの議論と筆者の見解が、示される。本章の読了後、改めて作品に目をやると、ブリューゲルの描く農民たちが、一層の輝きをもって目の前に立ち現れてくる。

本書が「季節画」を扱っている以上、四季の折々の機会をとらえて、本書を手には野外のお気に入りの場所に出向き、各章にちりばめられたその季節の論考を、その都度、通読するのも一興だろう。そうすれば、古の画家たちが移ろいゆく季節のなかで生を営む人々に向けた眼差しを共有し、私たちが生きるこの季節を違った心持ちで味わうことができるように思う。そんな、素晴らしい体験を、本書は与えてくれるのである。